

令和元年 6 月 28 日

軽度認知障害の段階でも、治療同意能力は低下していることを明らかに 同意能力低下を主治医は見落としやすいことも判明

◆発表のポイント

- ・「軽度認知障害」は、認知機能低下はあるものの、未だ認知症には至っていない段階を意味し、認知症のリスク状態として注目されています。
- ・薬の開始を相談するという比較的簡単な治療場面でも、軽度認知障害の患者さんのうち 30%程度が「治療同意能力」に欠けていることと、その同意能力欠損を医師が見落としやすいことを本研究は明らかにしました。
- ・患者さんが理解できるようなサポートを考えていくことが大切です。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（医）精神神経病態学の大島悦子医師、寺田整司准教授らの研究グループは、薬の開始を相談するという比較的単純な治療場面においても、軽度認知障害の患者のうち 30%程度で治療同意能力が失われていることを明らかにしました。また、治療同意能力が失われていた対象者のうち 40%程度については、主治医は、患者さんの治療同意能力欠損に気付いていなかったことも分かりました。本研究成果は、世界老年精神医学会の学会誌である「*International Psychogeriatrics*」電子版に 5 月 27 日に掲載されました。

軽度認知障害は、認知症には至らないが認知機能が有意に低下している状態で、認知症のリスク状態として注目されています。軽度認知障害の患者さんでどの程度治療同意能力が保たれているのかは、今まで報告はなく不明でした。今回の研究で、軽度認知障害の段階でも、口頭説明だけでは治療内容を十分理解し同意することができない患者さんが少なくないこと、さらに、主治医は患者さんの治療同意能力欠損を見逃しやすいことが明らかになりました。より多くの高齢者が医療を受けるようになる中で、認知機能が低下している患者さんが意に沿わない治療を受けることが減るように、安全に治療を受けられる環境作りが必要です。

◆研究者からのひとこと

「治療同意能力が無いから、治療を受ける当人ではなく代諾者に説明すればよい」というわけではありません。家族に同席してもらって説明をする事はもちろん必要ですが、理解力や思考力の低下をサポートできるように「文書を用意する」、「理解しやすい文章にする」、「イラストを用いる」など、同意取得の際に工夫が必要です。



寺田准教授



PRESS RELEASE

■発表内容

<現状>

「治療同意能力」は患者さんが自らの治療を決定する重要な機能です。高齢の方に治療の説明をしてサインをしてもらったものの、十分に説明の内容を理解してくれているのか不安になった経験を持つ医療者は多いと思います。健診や予防接種のように、危険性が低い医療を行う際には大きな問題になりませんが、侵襲や副作用を伴う治療を勧める場合には、説明を理解できるかどうかは非常に重要です。特に認知機能の低下した患者さんに説明する際には、その同意能力について慎重に判断する必要があります。

<研究成果の内容>

これまで認知症については多くの研究が行われ、治療同意能力を欠いている例が多いことが報告されてきました。しかし、認知症のリスク段階である「軽度認知障害」については、治療同意能力があると判断して良いのかどうか分かっていませんでした。そこで、本研究グループは、軽度認知障害の方 40 人と、健常高齢者の方 33 人を対象に MacCAT-T（注 1）という評価方法を用いて、治療同意能力の有無を評価しました。その結果、軽度認知障害の方の 3 分の 1 が、口頭の説明だけでは十分に理解して治療に同意することが難しいということが明らかになりました。さらに、患者さんの治療同意能力が欠損していることに主治医が気付かない例が多く存在することを示しました。

<社会的な意義>

医療の現場で、説明を受ける患者の認知機能をその都度評価することは現実的ではありません。しかし、説明をする医療者は、相手が高齢の場合には、認知症の診断を受けていなくても十分な治療同意能力を失っている場合が少なくないという事を認識しておく必要があります。今回の研究結果が知られ、医療者側の意識が変わっていくことが望まれます。

■論文情報

論文名：Competency of aMCI patients to consent to acetylcholine esterase treatment

掲載紙：*International Psychogeriatrics*

著者：Etsuko Oshima, Shintaro Takenoshita, Risa Iwai, Mayumi Yabe, Nao Imai, Makiko Horiuchi, Naoya Takeda, Yosuke Uchitomi, Norihito Yamada, Seishi Terada

DOI：10.1017/S1041610219000516

URL：<https://doi.org/10.1017/S1041610219000516>

■研究資金

本研究は、独立行政法人日本学術振興会（JSPS）「科学研究費助成事業」（基盤研究 C・17K10331、研究代表：大島 悦子）、及び慈圭会精神医学研究所研究費の支援を受けて実施しました。



PRESS RELEASE

■補足・用語説明

注1：MacCAT-T

実際の治療場面を想定した面接を行い、同意能力の要素とされている4つの要素（情報の理解、認識、論理的思考、選択の表明）について評価する心理検査です。

<お問い合わせ>

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（医） 精神神経病態学
准教授 寺田整司
（電話番号）086-235-7242 （FAX）086-235-7246



岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY



岡山大学は、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」を支援しています。